

令和6年度 東京情報大学総合情報研究所プロジェクト研究
研究実績報告書

1. 研究課題名

佐原三菱館の歴史に関する調査（川崎財閥の黎明期に関する調査）

2. 研究組織

区分	氏名	所属・職名
研究代表者	堂下 浩	総合情報学部 総合情報学科・教授
研究分担者	井関 文一	総合情報学部 総合情報学科・教授
	伊藤 幸郎	総合情報学部 総合情報学科・非常勤講師

3. 連携先団体等

団体名	担当部署
香取市役所	生活経済部 市民協働課
	総務企画部 企画政策課
	教育部 生涯学習課

4. 研究期間

2024年4月1日～2025年3月31日（5年計画の2年目）

5. 研究の目的

保存修理が進められてきた佐原三菱館は2022（令和）4年4月に竣工された。同館は千葉県有形文化財に指定される歴史的な建造物である。しかしながら、1914（大正3）年に同館を建設した川崎銀行の母体であった川崎財閥の資料は戦時下で焼失したことで、その建設経緯を含めた詳細は十分に解明されていない。

そこで本調査では同館に関わる資料、特に同館を建設した川崎銀行、及び川崎財閥に関連する資料を収集するとともに、香取市から修復調査で新たに発見された資料も加えながら、川崎銀行が佐原に荘厳な支店を建設した理由を解明する。さらに川崎銀行及び川崎財閥の経営実態に関しても一段と解明していく。

特に今年度は、川崎財閥が明治維新間もない時期に基幹的機能を担った営業店を佐原に開設した経緯を知るために、川崎財閥の基礎を築いた初代・川崎八右衛門について調査を進める。さらに今年度においては、新たに収集された情報をもとに様々なコンテンツを追加しながら、パネル展示や動画制作といった形で、研究成果のアウトリーチ事業を本格化するための準備にも注力する。

6. 研究報告

川崎財閥の礎を築き、川崎銀行を創設した初代・川崎八右衛門は、明治期における日本の経済発展に実業家として貢献した。しかしながら、川崎財閥が所有していた川崎財閥に関連する書類が太平洋戦争による戦火で焼失してしまったため、川崎銀行を含む川崎財閥に関して未だに解明されていないことが多岐にわたっている。

そこで今回の調査では、2回にわたる東京情報大学と香取市の共催による地域連携フォーラムの第一部による講演記録を整理し、さらに新たに発見された進藤寛（茨城大学・名誉教授）が収集してきた資料を紐解きながら、初代・川崎八右衛門に着目したうえで、現在においても謎が多く残されている川崎銀行を設立するに至った経緯、そして佐原を含めた千葉県に拠点網を築いた背景を調査した。本稿では、紙幅の関係上その総括として初代・川崎八右衛門の川崎銀行設立までにおける年譜（表1）を記載する。

表1 初代・川崎八右衛門の川崎銀行設立までにおける年譜

年月	川崎家の初代・川崎八右衛門の概要
1645(正保2)年 ※月日は明らかでない	川崎家の19代目であった川崎縫殿助が水戸の隣町である茨城県茨城町に位置していた海老沢村に進出。
1834年(天保5)年 12月 ※日付は明らかでない	川崎家の29代目として初代・川崎八右衛門が海老沢村にて誕生。
1849(嘉永2)年 ※月日は明らかでない	初代・川崎八右衛門が家業である海老沢村の回漕問屋を継承。
1850(嘉永3)年 ※月日は明らかでない	初代・川崎八右衛門が加倉井砂山の経営する「日新塾」に入塾。
1852(嘉永5)年 8月	初代・川崎八右衛門の父・守信が44歳にて死去。
1859(安政6)年から 1862(文久2)年	初代・川崎八右衛門は水戸藩で鑄銭事業を行うため、江戸幕府の老中や勘定奉行に鑄銭の許可を請願。
1863(文久3)年	水戸藩が江戸幕府より鑄銭事業の許可。
1864(元治元)年 8月 10月	江戸に台風が発生し、小梅の鑄銭場が滅失。 元治甲子の乱により、湊・龍ノ口の鑄銭場が焼失。
1865(慶應元)年 5月頃 10月 12月	初代・川崎八右衛門が鑄銭座取扱人に任命。 江戸の台風により滅失していた小梅鑄銭座の普請が完成。 小梅鑄銭座において鉄四文銭の鑄銭を開始するため、従業員が誓約書に署名。
1866(慶應2)年 2月 2月 2月 8月	初代・川崎八右衛門が、山口俊作とともに鑄銭座の設備改善策を建議。 水戸藩の鑄銭責任者(番頭役)に初代・川崎八右衛門が任命、取締役として山口俊作が鑄銭事業を統率。 小梅鑄銭座で鉄四文銭の鑄銭が開始。 小梅で鑄造された四文銭の江戸市中通用が許可。
1867(慶応3)年 4月	山口俊作が取締役となり、水戸の城東に位置する細谷村神勢館鑄銭場を開設。
1868(慶応4/明治元)年 3月 4月	初代・川崎八右衛門は、小梅屋敷内に鑄銭場を1か所増設し、2か所展開による百文銭を鑄造。 初代・川崎八右衛門は明治政府から鑄銭事業終止を命令され、小梅と高橋との鑄銭場は明治政府が接収。
1869(明治2)年 8月 9月	水戸藩は、明治政府から蝦夷地のうち天塩国苫前郡、天塩郡、上川郡、中川郡ならびに北見国利尻郡の計5郡を拝領し、開拓することへの許可を得た。 水戸藩は北海道開拓のため、100人を北海道に派遣。初代・川崎八右衛門も北海道派遣に同行。
1871(明治4)年 7月 8月	明治政府が廃藩置県を行った。 水戸藩が消滅。初代・川崎八右衛門は、明治政府の意向により、北海道開拓を断念。
1872(明治5)年 2月頃 12月	初代・川崎八右衛門は、耐火性や耐久性に優れているヨーロッパ式の煉瓦製造事業に進出。 東京府が、初代・川崎八右衛門に煉瓦製造事業の許可、小菅煉瓦製造所を経営。
1874(明治7)年 6月 7月	初代・川崎八右衛門は警視庁の御用金を為替取扱に任命。 初代・川崎八右衛門は為替方専門の組織である川崎組を創設、本店を日本橋檜町に設立。
1875(明治8)年 6月	千葉県の御用金を為替取扱と静岡県の御用金を為替取扱に任命。
1877(明治10)年 2月	西南戦争が勃発。
1878(明治11)年 10月	小菅煉瓦製造所を警視庁に譲渡。初代・川崎八右衛門は、煉瓦製造事業から撤退。
1879(明治12)年 11月	川崎組は、茨城県水戸に出張所を構え為替取扱に任命。

1880(明治13)年	1月	初代・川崎八右衛門は東京府知事へ川崎銀行の創設を願出。
	2月	東京府は、大蔵省に川崎銀行の設立を伺立。
	3月	大蔵省が、三井銀行と安田銀行に続く日本国内3行目の銀行となる合資会社川崎銀行の設立を認可。
	3月	初代・川崎八右衛門は、川崎銀行を設立し、水戸・千葉・佐原に支店ならびに出張所を開店。

出典：2023(令和5)年2月16日木曜日「佐原三菱館を建てた川崎財閥を知る ～初代・川崎八右衛門の足跡～」(講演者：久信田喜一)、2024(令和6)年2月9日金曜日「川崎銀行の誕生ストーリー～佐原三菱館の原点を知る～」(講演者：栃木敏男)といった東京情報大学と香取市の共催による地域連携フォーラムの第一部による講演、ならびに茨城県立歴史館の保管資料より筆者作成。

なお詳細は、本学紀要である『東京情報大学研究論集』(第28巻第1号)に発表された伊藤幸郎による「川崎銀行設立までの初代・川崎八右衛門に関する研究」(2024年10月15日発表)を参照していただきたい。

7. 成果の公表

① 学会誌への発表

本研究成果は、伊藤幸郎により「川崎銀行設立までの初代・川崎八右衛門に関する研究」というタイトルで、査読論文として『東京情報大学研究論集』(第28巻第1号)にて2024(令和6)年10月15日に発表された。

② パネル展示

以下の通り、佐原三菱館パネル展示を開催した。

- ・ 名称： 話譚 川崎銀行 佐原支店 (現・佐原三菱館) のヒストリ
- ・ 期間： 2025(令和7)年1月18日(土)～1月30日(木)
- ・ 場所： 佐原町並み交流館 (千葉県香取市イ1903-1)
- ・ 内容： 佐原三菱館を開設した川崎財閥の中核機関である川崎銀行に関するパネル展示。同館は旧三菱銀行が使用していた建物であるが、同館が開設された背景を知る上で、佐原と三菱財閥でなく、佐原と川崎財閥との関係を紐解くことが鍵となる。パネル展示を通して、佐原に荘厳な支店を建てた川崎銀行の歴史を解説した。

8. 総評

団体名 香取市

部署 市民協働課

「佐原三菱館(旧・川崎銀行佐原支店)」をテーマとした、昨年度末に発表された堂下先生と伊藤先生の論文「戦時経済下における銀行の合併経緯に関する研究 ―合併談から紐解かれる第百銀行に着目した考察―」、並びに今年度10月に発表された伊藤先生の論文「川崎銀行設立までの初代・川崎八右衛門に関する研究」を通して、香取市民は佐原三菱館の歴史だけでなく、川崎財閥が佐原の地域に着目して金融の拠点を設定した経緯を知ることができました。さらに、これら研究の知見に基づいたパネル展示を通して、香取市民が佐原三菱館の歴史的価値を理解し、地域の貴重な有形文化財を保存する意義を考える機

会となりました。

現在、東京情報大学では佐原三菱館をドローン等の器材で記録し、川崎銀行佐原支店が開設された往時の姿を解説する動画作成を準備されていると報告を受けております。こうしたコンテンツの発信は香取市民だけでなく、国際的にも香取市佐原の伝統的建造物群保存地区と景観形成地区の魅力を伝える機会となると期待しております。

引き続き、香取市民が香取市の文化財に対しいっそうの愛着を深めていただくための機会創出を、東京情報大学と協力しながら進めていく所存です。併せて、東京情報大学からのご支援を宜しくお願い致します。